

世界の真珠王

み きもと こうきち
御木本 幸吉 (1858－1954)
御木本真珠店



§ 人物データファイル

株式会社ミキモト提供

出生

安政5年1月25日(1858)志摩国鳥羽浦大里町(現・三重県鳥羽市)に、御木本音吉、もとの長男として生まれる。幼名は吉松。家業は代々、阿波幸の屋号でうどんの製造・販売を営んでいた。父音吉は、うどん粉をひく石臼を自ら改良するなど、商売よりも機械類の発明・改良に関心がある人物であった。これに対し、祖父吉蔵は「うしろに目があるような人」と言われたように、先が見え商才に長けていた。幸吉は、父からは発明家としての血を、祖父からは実業家としての血を受けついただといわれている。

生い立ち

幸吉は、「町人(商人)には学問はいらない」という当時の世相と、病弱な父のために家業を手伝わなければならなかったという事情から、正規の学校教育はほとんど受けていない。9歳から12、13歳にかけて、読み書きそろばん、読書などを習ったが、いずれも寺子屋教育の域を出ないものであった。

実業家以前

幸吉は、早くから1杯8厘のうどん屋だけでは大きな利潤は得られないと考え、明治4年(1871)家業のうどん屋を手伝いながら青物の行商も始めた。

明治9年(1876)の地租改正で、納税方法が米納から金納に変わったのを機に、青物商から米穀商に転向し、明治11年(1878)2月、20歳で家督を相続、御木本幸吉と改名した。同年3月から、見聞を広めるため東京・横浜、翌年に大阪・神戸へ視察旅行に出かけた。この旅行経験を通じて、

真珠をはじめ志摩の特産物である海産物が、外国人、特に中国人向けの有力な貿易商品になりうることを見だし、海産物商人へと再び転身することとなった。

年少ながら商才に長けた幸吉は、明治13年（1880）22歳で鳥羽町会議員となり、商人として発展するために必要な社会的信用と地位を得た。その結果、商人として有益な役職をも獲得することとなった。明治14年、志摩国物産品評会委員、同17年に三重県勸業諮問委員、翌18年には三重県商法会議員となり、鳥羽の商人から三重県の商人へと成長していった。このような活躍が認められ、明治14年、元鳥羽藩士久米盛造の長女うめと「身分の差」を越えた結婚をした。

幸吉は、海産物商として志摩の海産物を実際に売買するうちに、天然真珠に強い関心を持つようになった。しかし、当時は、志摩地域の天然真珠が高値で取引されていたことから、業者による乱獲が行われ、アコヤ貝（真珠貝）の絶滅が危惧されるようになっていた。明治21年（1888）6月、東京・京橋で開催された第2回全国水産品評会に改良イリコと真珠を出品、2等賞を受賞した。そこで大日本水産会幹事長・柳檜悦やなぎならよしに会い、アコヤ貝の乱獲防止策について相談したところ、アコヤ貝の養殖を勧められた。同年9月、幸吉は英虞湾内の神明浦あご しんめいうらでアコヤ貝養殖を試みる。

明治23年（1890）4月、柳檜悦の要請で、東京・上野で行われた第3回内国勸業博覧会に真珠と生きた真珠貝を出品した。博覧会開催中、柳檜悦の紹介で、水産動物の第一人者である東京帝国大学教授・箕作佳吉みつくり かきちとの面会が実現した。博覧会終了後、幸吉は、神奈川県にある東京帝大の三崎臨海実験所に箕作博士を訪ね、真珠養殖の実例、研究成果などについて示唆を受けた。同年9月、神明浦と鳥羽湾内の相島おじま（現・ミキモト真珠島）の2ヵ所で養殖真珠の実験を開始した。

明治25年（1892）神明浦に赤潮大発生、養殖実験貝のほとんどが死滅したが、明治26年7月、赤潮を免れた相島のアコヤ貝の中から、5個の半円真珠が発見された。同年10月、幸吉は英虞湾内の田徳島たとく（のち多徳島）に真珠養殖場を創設、本格的な事業を開始し、明治29年（1896）半円真珠の

特許を取得した。

実業家時代

核入れ作業が上達したこともあり、良質の真珠を大量に採取することに成功した幸吉は、真珠養殖場を発展させていった。明治38年（1905）多徳島が大規模な赤潮に襲われ、養殖貝の5分の4にあたる85万個を失ったが、死んだ貝を開いていくと、大粒の真円真珠が5個現れた。これをきっかけに真円真珠の開発が本格的に進められ、桑原乙吉ら養殖技術の研究員によって確実に真珠質を核に巻かせる方法が完成、明治41年（1908）特許を取得した。俗に「明治式（38式）」と呼ばれる方法である。

真珠の生産が軌道に乗り始めたところで、幸吉は販売の体制固めに着手している。明治32年（1899）東京・京橋区弥左衛門町（現・中央区銀座4丁目2番地）に真珠専門店「御木本真珠店」を開設した。店ではすべて正札が付けられ、決して値引きはしないことで、信用を高める商法が厳守されていた。これは真珠の価値を値引きによって下げてはならない、という幸吉の信念のあらわれであった。当初は銀座の裏通りにある小さな店であったが、明治35年（1902）元数寄屋町の店舗（現・中央区銀座5丁目6番地）に移転し、4年後の明治39年には、現在のミキモト本店のある銀座4丁目の表通りに移転した。

また、元数寄屋町に店舗を移転するにあたって、真珠の加工にも乗り出し、かねてから取引のあった細工工場を下請工場として、半円真珠を使った装身具の製作を発注した。「生産・意匠・加工・販売」の一貫体制を目指した幸吉は、明治40年（1907）この工場を買収し、「御木本金細工工場」（のち「御木本貴金属工場」と改称、現・株式会社ミキモト装身具）と名付けた。創設時には京橋区築地にあった工場は、翌41年には、銀座の真珠店に近い麴町区内幸町（現・千代田区内幸町）に移された。

大正8年（1919）いわゆる「^{ぜんかんしき}全巻式」と呼ばれる技法の特許を取得し、養殖真円真珠の大量採取が可能となり、同年、初めてロンドン市場にも売り出した。これより先、生産は半円から本格的な真円真珠へと移行し、御木本の真珠養殖場は、三重県内のみならず、他県へも規模が拡大されて

いった。

大正15年（1926）から昭和2年（1927）、幸吉は約10ヵ月に及ぶ欧米視察の旅に出た。その際、渋沢栄一の紹介でトーマス・エジソンとの会見を実現させて、自らをアメリカのマスコミに売り込んだり、ニューヨーク支店の開設を決定する仕事をこなしている。その後、パリ、ボンベイ等の支店も開設し、海外にも販路を拡大していく。

昭和7年（1932）養殖真珠の品質、価格の維持、生産の調整、新規業者の抑制などを目的とした日本養殖真珠水産組合を設立し、幸吉は組合長に就任した。昭和初期の真珠業界は業者の対立や供給量の増加に伴い、粗悪真珠が出回っていた。幸吉はこれを嘆き、業界のリーダーとして、36貫（135kg）の粗悪真珠を海外との取引が最も多い神戸商工会議所前で焼却し、良品販売の模範を示した。このことは「真珠の火葬」事件として、内外に大きな反響を呼んだ。

昭和10年代以降は、戦争への危機とともに真珠業界にとっても苦難の時期であった。昭和12年（1937）には日中戦争に突入、1939年、ヨーロッパにおいては第二次世界大戦が勃発した。国内では戦時体制を組むための方策の1つとして、昭和15年（1940）7月7日、「奢侈品等製造販売制限規則（七・七禁令）」が発令された。これにより真珠は贅沢品と見なされ、商売として成り立たなくなった。幸吉は、昭和14年から17年の間に次々と養殖場を閉鎖し、養殖事業の機能は英虞湾を残すのみとなった。また、内外の時局の悪化に伴い、海外支店も閉鎖を余儀なくされた。

戦時下の深刻な経営危機を乗り切るため、古くから薬用として利用されているケシ玉（小粒の真珠）を原料とした、新たなカルシウム剤の製法で特許を取得し、昭和18年（1943）カルシウム剤を生産する企業として伊勢薬業株式会社を買収した。伊勢薬業は、終戦時の昭和20年（1945）「御木本製薬株式会社」と改称して新たなスタートを切った。

戦時中の昭和19年（1944）に鳥羽の本宅と工場を海軍に接收されてから、幸吉は多徳養殖場（新多徳）に移住していたが、終戦直後から、マッカーサー元帥夫人や駐日米軍司令官ウォーカー中将夫妻等、米軍関係者を中心

とした海外要人が、世界の真珠王・御木本幸吉に一目会おうと、次々と養殖場を訪れた。また、昭和26年（1951）昭和天皇の多徳養殖場見学があり、幸吉を感激させている。昭和29年（1954）には香淳皇后が多徳養殖場を見学、他にも多くの皇室、皇族の訪問が相次ぎ、皇室、皇族と御木本とのつながりの強さを内外に示した。さらに、吉川英治、徳川夢声などの著名人も幸吉のもとを訪れ、彼と歓談している。

政治との関わり

大正13年（1924）多額納税者として三重県の貴族院議員に勅選されたが、自らの事業を優先して翌年には辞任している。

社会・文化貢献

御木本幸吉は「宮川（伊勢）以南の金次郎」を自称するほど、二宮尊徳の報徳精神を崇拝しており、それが郷土の発展のために多くの業績を残すことにつながったといわれている。旧国鉄参宮線の鳥羽乗り入れと鳥羽から賢島に至る旧志摩電鉄（現・近畿日本鉄道）の開通に尽力したほか、道路の改修・整備なども推し進めた。また、伊勢志摩の景観保護のため国立公園設置を目ざす陳情もしている。このほか神社仏閣や学校などの公共施設に対し、惜しみなく寄付を行った。

晩年

終戦直後の混乱から立ち直り、真珠ブームが一つの頂点に達した昭和29年（1954）9月21日、持病の胆石の発作に老衰も加わり、新多徳の自宅で息をひきとった。享年96歳。墓所は鳥羽市の^{さいしやうじ}済生寺、戒名は真寿院殿玉誉幸道無二大居士。

関係人物

真円真珠の養殖技術の開発において、^{にしかわとうきち}西川藤吉、桑原乙吉の功績は大きい。彼らの協力を得て、御木本幸吉名義の真珠に関する特許が多数取得されている。

西川藤吉 東京帝国大学動物学科を経て、農商務省水産局技師となり、在学中より^{いいじまいさお}箕作佳吉、飯島魁両博士の指導の下で真円真珠の養殖の研究

を行った。幸吉の次女みねと結婚し、御木本の真円真珠養殖の研究に貢献したが、明治41年（1908）御木本養殖場の研究所を去っている。これは、科学者であった西川と事業家としての御木本との意見の対立が原因であるといわれている。

桑原乙吉 鳥羽で歯科医院を開業していたが、歯科医の知識と技術が、貝に核を挿入する真珠養殖に応用できるとして、明治35年（1902）御木本養殖場に迎えられ、真円真珠の開発研究に従事した。

エピソード

明治29年（1896）真珠養殖において幸吉を支えてきた妻うめが5人の子を残して、32歳の若さで急死した。幸吉は、うめに先立たれてからは、その労苦に報いるため終生独身を通した。外出時と帰宅時には必ず仏壇を拝み、位牌を撫でてその加護を謝した。そのため位牌の漆が剥落したほどであった。

キーワード

皇室御用達 皇族と幸吉との関わりは、明治20年（1887）に英照皇太后真珠買い上げの際、宮内省より鑑定を命じられたことに始まる。明治24年（1891）には小松宮彰仁親王より「養真珠」の親筆を授かり、皇室とのつながりが深まった。幸吉は、厳格な品質管理、加工技術の向上、デザインの開発に力を注ぐ一方で、たびたび皇室に真珠を献上し、大正13年（1924）宮内省御用達の登録掲示の許可を受ける。皇室という大きな権威を持つ顧客からの信用を得ることで、ブランドを確立していったのである。

活字と輪転機 実業家としての御木本幸吉の特質は、その巧みな宣伝力にあった。特に、新聞記事による宣伝効果や利用価値の高さを認識しており、徳川夢声との対談集『問答有用』の中で「世界の人気をあおるのは輪転機の力でなきゃいかん…」 「…三面記事でやらないかんと思うた。新聞広告に一文も払わんことにしとるんだ」と語っている。また、国内外の各種博覧会に意欲的に出品し、趣向をこらした展示物によって真珠のPRに努めた。アイキャッチャーとしての効果を狙って、真珠をふんだんにちりばめた豪華な作品を出展し、ミキモトパールの売り込みを図った。

神奈川との関わり

二宮尊徳に深く傾倒していた幸吉は、尊徳の生誕地（現・小田原市栢山）が荒れていることを聞き、明治42年（1909、『御木本真珠発明100年史』では明治43年）尊徳誕生地を購入、整備した後、中央報徳会に寄付した。また、東海道本線利用（現・JR御殿場線）の来訪者のために、松田駅長と交渉して、松田駅に「二宮尊徳翁誕生地栢山道 約一里半」という石の道標を建てた。

§ 文献案内

著作

御木本幸吉の著作は刊行されていない。御木本幸吉の考えや言動は、生前の対談や親族が口述や回想をもとにまとめたものによって窺い知ることができる。

社史

『御木本真珠島のあゆみ』御木本真珠島編 御木本真珠島 1975 〈K〉

『御木本真珠島 40年の歩み』 御木本真珠島 1991 〈K〉

『輝きの世紀』御木本真珠発明 100周年史合同編纂委員会編 御木本真珠発明 100周年史合同編纂委員会 1993 〈K〉

御木本真珠発明100周年を記念して、『御木本真珠発明100年史』のビジュアル版として刊行された。

『ミキモト：真珠王とその宝石店 100年 (Kila library)』Kila 編集部編 エディコム 1993 〈Y、K〉

真珠発明 100年を記念して企画・刊行された書。真珠発明 100年は日本のジュエリー100年、御木本幸吉は「ジュエラー」であるという視点に立って、養殖と真珠だけでなく、ジュエリーと宝石店としてのミキモトの歴史をたどっている。ミキモトでデザインされてきた宝飾品のカラー写真が、数多く掲載されているのが特徴である。

『御木本真珠発明 100年史』ミキモト編 ミキモト 1994 〈Y、K〉

ミキモトグループ中核4社（ミキモト、ミキモト装身具、御木本製薬、御木

本真珠島)が御木本真珠発明100周年を記念して、グループ全体の歩みを客観的な視点からまとめたもので、各社の沿革と資料・年表を掲載。

『ミキモト装身具100年史』ミキモト装身具編 ミキモト装身具 2008 〈K〉

伝記文献

『御木本幸吉』乙竹岩造著 培風館 1948 〈未所蔵〉

『伝記御木本幸吉』乙竹岩造著 講談社 1950 〈Y、K〉

御木本幸吉の四女あいの夫で教育学者である乙竹岩造が、幸吉の述懐と身辺所蔵の記録文書や当時の新聞記事等によって編集した伝記。御木本幸吉の主要な伝記の一つである。

「御木本幸吉：智運命」御木本幸吉[談] 『私の哲学』思想の科学研究会編 中央公論社 1950 p11-18 〈Y〉

「御木本幸吉」徳川無声[対談] 『問答有用 無声対談集3』徳川無声著 朝日新聞社 1953 p303-312 〈Y〉

『御木本幸吉（一業一人伝）』御木本隆三著 時事通信社 1961 〈Y、K〉

御木本幸吉没後、長男隆三によって著された伝記。第一編は生い立ちから昭和9年（1934）頃までの伝記的記述、第二編では親族ならではの幸吉のエピソードが紹介されている。

『御木本幸吉（少年伝記文庫17）』乙竹宏著 国土社 1962 〈Y〉

御木本幸吉の孫である著者（母は幸吉の四女あい）が子供向けに書いた伝記。

『幸吉八方ころがし』永井龍男著 筑摩書房 1963 〈Y、Yかな〉

御木本幸吉の生涯を、調査・取材にもとづいて描いた伝記小説。

『御木本幸吉（人物叢書159）』大林日出雄著 吉川弘文館 1971 〈Y、K〉

御木本の親族、関係者の資料だけでなく、その他の側面からの資料も使って、客観的な立場で御木本幸吉の生涯をたどった評伝。幸吉を発明家としてではなく、真珠の養殖法をはじめて事業化した人物として位置付けている。

『御木本幸吉の思い出』御木本美隆著 御木本真珠島資料編纂室 1979 〈K〉

御木本幸吉の孫（刊行当時ミキモト会長。父は幸吉の長男隆三）がミキモトの社員に向けて、祖父幸吉の思い出を、事業と家庭を中心に書き、冊子にまとめたもの。

『父、御木本幸吉を語る』乙竹あい著 御木本グループ 1993 〈K〉

父御木本幸吉の記憶を、四女あいが93～94歳の時に口述し、まとめたもの。

「信念を貫いた企業家活動 御木本幸吉と相馬愛蔵」生島淳著 『ケースブック日本の企業家活動』法政大学産業情報センター編 有斐閣 1999 p123-143 〈K〉

『世界に飛躍したブランド戦略（シリーズ情熱の日本経営史2）』藤井信幸著 芙蓉書房出版 2009 〈Yかな、K〉

¶ 参考文献

『真珠の発明者は誰か？ 西川藤吉と東大プロジェクト』久留太郎著 勁草書房 1987 〈Y、K〉

著者は西川藤吉の孫、御木本幸吉の曾孫にあたる。複雑な経過をもつ真珠の発明の歴史を、多くの資料をもとにたどり、真珠の発明者は誰かであるのかを検証している。

「尊徳誕生地を訪れた御木本幸吉」関田昇著 史談足柄（44） 2006 p48-59 〈Yかな〉

「MIKIMOTO Official Site（ミキモト公式サイト）」

<http://www.mikimoto.com/> （参照2011-11-15）

<柿澤淳子>